

とは全然別な農法が展開されなければならない。それは多様性に特徴のあるものであって、処方箋がきまったものではないだろう。最近注目されているアグロフォレストリーとは、定式化したものではなくて考え方の段階で示されるものであろう。多様な熱帯多雨林の地域ごとに科学的な知識をもった知恵ある現地民が創造する農法こそがこの地方で人々が安定的に暮らせる唯一の手段となるだろう。

おわりに

インドネシアの東カリマンタンに派遣されている間に見た各地の様子をお伝えした。技術援助の成果は短期間で出るものではなく、まずは相互理解からという段階である。熱帯降雨林研究プロジェクトの問題意識は、森林を保全し地域の人々の生活を向上させることにある。つまり森を生かし森に生きることを目指すわけが大変大きな課題である。日本においても国土の保全と地域の振興とは大きな課題であって、この調整が国民的課題となっている。カリマンタンでの経験は、この問題を地域に根ざし、地域の人々の立場で考えることを教えてくれた。水平線が見える程大きいスマヤン湖で夕日を浴びながら悠々と泳ぐ淡水イルカの姿は、人間の浅はかな目先だけの知恵は受けつけないだけの壮麗な雰囲気をもっていった。

新刊紹介

◎熱帯林のゆくえ—みどりの国際協力 神足勝浩著 A5版 200pp(本文177pp 参考資料16pp) 築地書館 1987年6月18日発行 価格2,000円

“みどりの国際協力”この頃でこそ広く使われるようになったが、20年余も、情熱を傾けてこの言葉を実行に移されてきた著者が使われると、その間のご苦労の一端を知るものとして、しみじみと重みを感じる。本書は著者が国際協力を打ち込まれるようになったキッカケから、国際協力事業団の誕生、それを通して育ててこられた協力の事例などを、世界の森林資源に関わる問題や、熱帯林破壊の問題などを織りまぜながらまとめられたもので、I：未知のみどりを求めて、II：日本の木材需要と開発途上国の緑の実態、III：みどりの国際協力、IV：熱帯林の破壊と対応、V：立ち上がる隣国の緑づくりに励まされて、の5章にわけられている。世界50余カ国にわたる著者の豊かな経験と、その中で育かれた幅広い交友録も織りなされており、読み物としても興味深い。“みどりの国際協力”に関心をもたれる方々にぜひ読んで頂きたい一冊である。

(浅川澄彦)